

第41回水疱症研究会 ランチョンセミナー

治療現場に即した 天疱瘡・類天疱瘡に対する IVIgの使いかた

2020年

1月11日 土

12:00-13:00

愛媛県医師会館 5・6階ホール

座
長

新潟大学大学院医歯学総合研究科
分子細胞医学専攻細胞機能講座 皮膚科学分野 教授

阿部 理一郎 先生

演
者

慶應義塾大学医学部
皮膚科学教室 専任講師

山上 淳 先生

第41回水疱症研究会 ランチョンセミナー

治療現場に即した 天疱瘡・類天疱瘡に対する IVIgの使いかた

山上 淳

慶應義塾大学医学部皮膚科

天疱瘡および類天疱瘡の診療ガイドラインに示される治療の目標は「寛解」、すなわち少量のステロイド内服（プレドニゾロン換算で10mg/日以下）単独または必要最小限の免疫抑制薬の併用のみにより皮膚・粘膜症状を認めない状態を維持することである。寛解を達成するために、免疫抑制療法が主体となる天疱瘡・類天疱瘡の治療において、免疫グロブリン大量療法（IVIg）は、きわめて独特かつ重要な役割を果たしてきた。当科では、治療導入期には初期治療が不十分だった場合の追加治療として、治療維持期には再発した症例および再燃のリスクが高い症例におけるステロイド減量の補助療法として、主に難治例に対してIVIgが使用されてきた。これまで当科で天疱瘡・類天疱瘡に対して施行されたIVIgについて、その適応や使用にあたっての考え方、治療経過と成績等を現場の視点から振り返る。